

〈翻刻〉 『拾遺和歌集紀聞』

福田, 智子
九州大学大学院修士課程

<https://doi.org/10.15017/10379>

出版情報 : 文献探究. 29, pp.1-18, 1992-03-31. 文献探究の会
バージョン : published
権利関係 :



〔翻刻〕『拾遺和歌集紀聞』

福田 智子

【凡例】

- 一、九州大学附属図書館音無文庫蔵「拾遺和歌集紀聞」下（写本。本来は上下二冊であったと見られる。）を翻刻する。原本は縦二三・九センチ、横一七・四センチ、墨付四四丁、一面十行。奥書はなく、書写者・書写状況については不明であるが、近世末の書写と思われる。
- 一、漢字は常用漢字に改め、適宜、句読点を施した。
- 一、私に加えた「ママ」・その他の文字は、（ ）に囲むことによつて、底本に存する文字と区別した。
- 一、定家本に基づき、歌番号を付した。
- 一、一面の終わりに「を付し、丁の終わりにには丁数を挙げた。



拾遺和歌集紀聞 下

（半丁白紙）

拾遺和歌集

恋一

しのふるも誰ゆへ云々 しのふはかくすところへると
 の二つあり。いひたきことをこらへるは、そなたゆへ
 となり。今はもはやへたてこらへ、かくす事では
 なき。初て思ふ心をいひしらすとなり。

(514)

なけきあまりついに云々 ついに色にいて、もいはぬ
 事は、人しらぬほとに、さらはいはんかと思ふ
 となり。

(515)

あふことをまつにて云々 住の江に生たるもの
 ならねと、あふをまつにとしふるとなり。
 みぬ人のこひしきや云々 なそは何そにて、なん
 のことじやといふ意なり。

(516)

よそにのみみてやは云々 すあつむ花は今の紅花なり。
 身にしみて思ふ云々 色はしむもの、染るといふ
 もしましたるものなり。

(517)

音にのみき、つる云々 我もつれなき人をこふるは
 こちもつれなきに習ふたとなり。
 いかにしてしはし云々 しはしも不忘と命等

(518)

わすれたきとなり。
 あはれともおもはし云々 そなたはあはれともお
 もはぬを、しらゆきの下にきえて名をふると世。

(519)

ほともなくきえぬる云々 身をつむはこたへるを云。
 俗に我身つめて人のいたさしるといふも
 こらへることをいふ。

(520)

おほはらのかみも云々 心やはのそみにかなふ事な
 り。かみもこふる事はしるらん、けふは神も
 我本望をとけきする日なるへし、となり。
 女を神にしたて、よめり。

(521)

さかきはの春云々 枝おほきゆへ折たるといふてか「ミ
みも不咎とうけかふたり。

(006)

おく山のいはかき云々 みこもりは水のこもり
うかかぬをいふ。

(007)

あまたみしよの云々 とよのみそきは、ゆたかなるみ
そきなり。

(008)

玉江こくこもかり云々 さしはへては、多く並て
なり。又わきくなり。爰はわきくの意なるへし。

(009)

みくま野のうらの云々 た、には一向なり。
我ためはたな井の云々 たな井は田中の井の

(010)

清水なり。ぬるきはにこるなり。なをかきやらん「ミ

は、ふみやるをいふ。ぬるきは先の女をいふ。ふみ
やりてもかてんせねとも、なを事やらんとな

(011)

り。さてはそふしたらはなり。

(012)

かきやらはにこりこそ云々 みくつは水の中に
こり水のくすなり。誰かすませみる人はあ
るましとなり。

(013)

人しれすおつる云々 なみたなかる、とみえす
してなり。ての字、にこりよむへし。
逢こととはかたいさり云々 た、む月にもは、このつこ

(014)

もり過たらはあはんかと思ふに、あはす又「ミ
此月もあはすして、あはて月日ふるをいふ。

(015)

あふことを月日に云々 大かたいつころとかそへまつ
ときは、はやく其日にしたきとなり。

(016)

行末はつゐに云々 恋初て、ゆく末過ゆきく
して、とし月たちてあふことなし。いつ
までもかくすきゆきくして、あふ事

(017)

なきか侘しきとなり。

人しれす思ふ云々 いやいひ出すにてはあるま
いくと思ひと、めて門を過るか、けふはとふも

(018)

いはねはならぬとなり。「ミ
つゆはかりたのむる云々 何に思ひをきけんは、何
を思ひしるしをきたるそ、何のおほえかある

(019)

そとなり。
なかれてたのむる云々 いつまでもぶらくな
れてたのむより、恋しき最中に、なぜわたり

(020)

せぬことそとなり。
あひみてはしにせぬ云々 むかふかたのむるとき、
いのちか延るからは、あふては不死身となら

(021)

んとなり。
いかてかと思ふて、ろの云々 とふぞあへばよいが「ミ
と思ふ心のあるときは、はつきりといはず、さ

(022)

れはといひ出そふなる所をいはず、心もと
なそふにいふときは、うけかはんかとうれし
きとなり。

(023)

わひつ、もきのふ云々 きのおまては過てきたか、
けふはもはや死ぬるとなり。きはけりにかよふ
なり。

(024)

恋二
春の野におふる云々 なき名たつほとくるし
きなし。我身つめりて人を思ひやる人「ミ

(025)

さへなき。この人の字、世間の人をさす。
あちきなやわか名は云々 あちきなきは味ふ気な
きなり。うまふなきなり。

(026)

こはた川こはたか云々 こはこれはなり。

ゆめかとも思ふ云々 ちよつとみたはゆめかと思ふ

へけれど、ねもせず、寝ぬからはゆめはみぬは

つに、何そ心にはすれかたきとなり。ねやは

せしは、ねなんだなり。

あきまたきつゆ云々 ひるの間はかりか、あはぬ晩

にははやゆくに、それにこひしきは、何とし」手

たることそとなり。

か、らてもありにし云々 もとはかやうにもなか

りしか、段々なしみて一日不逢は、こひ

まさるとなり。

あき氷とくる云々 うちとけてまた間もなきに何

とてかやうにそてぬる、となり。

明暮のそら云々 下の句、我のそみのところへ十分

にゆきと、かぬま、に、あけくれのそらに迷ふ

となり。

ひさしくもおもほへ云々 久しきこと、も不一手

寛とも、松か二代生かはりたる抗(程々)に思ふと

いふか、やはりひさしきなり。

何せんにむすひ云々 ひよんな事したり。人を

待ほとくるしきといふをしらすはさもあ

れ、よくしりゐてちきり初たり。何とせふ

と思ふて、かやうに人に契をむすひ初たる

となり。

けさうし侍ける云々 夏至の日はおと

こ女の交せぬ日なり。しかればけふは

おとこの側へよりもおおかされまいと」手

(706)

(708)

(709)

(710)

(711)

(712)

(713)

(714)

(715) 万葉集

安堵して側より、女、用心せず。ゆ

るりとたゆみて物いひしに、おとこ

おかしたり。それをうらみて後に

あふましくといふなり。

万葉集和し侍けるに 万葉の歌

を和するなり。

思ふらん侍従に云々 つきなきは不似合なり。

我なからさも云々 思はぬ人のこひしきは我

なからもとかしきとなり。

人めをもつ、まぬ云々 人めつ、むゆへ、なみたお手

つる、つ、まねはかく袖にか、りはせまいと也。

しのふれはくるし云々 下の句、一向ほに出んか

となり。

おもひきやわか云々 一年あはぬとなり。

侘ぬればつねは云々 ゆ、しきは、いまくし

きなり。あまりあはぬに侘ては、七夕うらやま

しくなるとなり。

今さらにとふへき云々 てへは、といへなり。

秋はわか心の云々 心のつゆは、なみたなり。

恋三手

秋の夜の月かも云々 こ、らはおほきなり。

てる月も影云々 月も水底にうつる影と同

しやうに似たるに、我は似たる物なき恋す

る。恋も我心の先へうつれば、先の心も我と

同じやうにうつるはづが、我はかり先へうつ

りて、先の心はうつりこぬとなり。

万葉集和せる歌 万葉の恋の歌

(716) 万葉集

(717) 万葉集

(718)

(719)

(720)

(721)

(722)

(723)

(724)

(725)

(726)

(727)

(728)

(729) 万葉集

を和す。

長月のあり明の云々 ありつ、もは来ず此ま、

(755)

にありつ、もなり。君かまれにも来たら「ま
は、かくは恋ふまし。まれにも来ぬとなり。
ことならはやみにそ云々 同し事ならは、やみ
にしたい。月あるゆへ、思ふ人かもし月ゆへ
に来たらんと思ひもせんかと、来ぬ人かま
たる、となり。

(756)

ふらぬ夜の心を云々 ふれは人來ぬゆへつらし
と思ふに、ふらぬ夜も来す。この心しらすし
て、雨ゆへ来ぬと雨をつらしと思ひしと
なり。

(757)

長き夜も人を云々 なが夜中の仕事なり。な「ま
きあかすとなり。
よるともねられきり云々 きこへす。
むは玉のいもか云々 今よひおとことひゆかぬゆへ
我とそひ覆せぬ床に、かみかみたれ出て
あらん、女か我をこひしかり、なきあるにて
あらんとなり。なひき出ぬらんは、かみかばら
くとなりて、みたれ出るとなり。

(758)

いかなりしとき云々 た、一夜のいたつらふし
を、いかなるときくるしといふたるそ、今は夜
くいたつらふしとなり。「ま
まきしてふやその云々 夕ぐれに辻占するなり。
夕けしきをとふなり。占まきしき占にあひ
占まきしきなり。

(759)

ゆふけとふうらにも云々 こよひ来るといふ占に

(760)

さへ来ぬ人は、いつか来んとなり。よくありは

占方の吉をいふ。

いにしへをいかて云々 上の句は、何とそいにし

(810)

へのとをりにしたきと思ふ意。下の句は今宵
ゆめを春にして、ことしをはやくた、し

たい。内へゆきたるといふゆめを、春にしたきと「ま

いふに、わけあることなりとみえたり。

かのをかにき云々 なはをなみは、からげるなはな

(811)

きなり。下の句、ねりたる麻芋なり。くたけてそ

思ふは、とやかく思ふ意。

なかめやる山へは云々 こ、のおほつかなきは疎遠

(812)

なり。

わかせこをならしの云々 我せこをなれさすと

(813)

かけたるなり。

しの、めになきこそ云々 物思ふやとかいちらる

(814)

しく合点してか、なくとなり。「ま

夏衣うすき云々 うすくともよし、ひとへのもの

(815)

は身になる、ゆへなり。

人ことはなつの、云々 たつきはりは、手きはるなり。

(816)

手さへきはらは、人ごとほま、よとなり。

山かつのかきほに云々 なてしこは、かはゆがり

(817)

なつる子といふ意。

わかせこかきまきぬ云々 思ふ人來ぬよひの秋

(818)

かせは、こぬ人よりうらめしく身にひやつ

くとなり。

しめゆはぬのへ云々 この女もしめゆひ、こちのも「ま

(819)

のにしてをけは、かくは物思ふまいものをと

なり。

わかせこをわか云々 ちか物思ひすれば、草さへ

(845)

うらかる、やうにみゆるとなり。

みよしの、ゆきに云々 下の句、来た道をもと

(847)

めても求められぬゆへ音をなくとなり。

恋四

一条撰政云々 ひんなしは、かたらふ

(850)

たよりなしなり。

我やとははりま云々 はりまかたならば、あかし」二〇

(855)

ゆへ夜の中にいぬともあかければよし。我やと

ははりまかたならぬゆへ、夜の中はあか、らぬに

夜こめにゆくとなり。

みな人のかきに云々 今はかく絶てありくくて

(858)

も、なをのちにあはんとそ思ふとなり。

玉川にさらす云々 さらくには、あらためく

(860)

てなり。

いそのかみふりにし云々 人にすてられたるを

(862)

たゝるとす。すてられたるをいのりかねたる

なり。すてられたれば、願立て詮なき」二一

やうになるとなり。

石上ふるの社の云々 あげくれ恋ふはかりで、

(867)

あんとは思はず。どこぞではあはふと思ふたる

となり。

人しれすおつる云々 なみたつもりてなみたの

(878)

水にかすかくほとになりたるとなり。

つのかにのなには云々 こいといふてみよ、ゆく

(888)

となり。

たひ人のかやかり云々 まろは我なり。

(888)

なには人あし火云々 下の句、我妹は常住めつ」二二

(887)

らしとなり。めつらしは愛する辞、とこは

常になり。

すみよしのきしに云々 恋ゆへに死ぬとも忘れ

(888)

れずに死にたいとなり。

さしなから人の云々 さしなからは、さふしな

(890)

からなり。いくへなるらんは、いくへへたてあ

るそ、へたてたりと思ふと、さしなからにて

さらぬ体なり。

あしねはふうきは云々 つれなきは何ともな

(893)

きなり。恋の上につれなきといふ。こちは思へ」二三

とも、むかふの人か何とも思はぬ意なり。

たらちねのおやの云々 いふせくはきうくつなる也。

(895)

おやの手にあるゆへ、思ふやうにいもにあはず

して、きうくつなとなり。

うかりけるふしをは云々 これまでの物いひすて

(898)

て、今はしめて来る人と思はんとなり。

思ふとていとこそ云々 いかふ人になれぬかよ

(900)

し、なる、と習ひになりて、みぬ間か恋し

いとなり。しる(き)ならひてそは、それにならひ

てなり。」二四

手枕のすきまの云々 すきまの風さむかりし

(901)

か、今はひとりも覆るとなり。

あふことのかたかひ云々 駒を一年こ(き)ふを、かたかひ

(904)

といひ、二年かふをもちかひといふ。

思ひきや云々 思ひきやは、おもひけりやなり。

(907)

わかかへるみちの云々 おくりくへき人はおくらす
とも、駒はいな、けとなり。

(901)

なげきこる人云々 ほとくしくは、ほとへ
たるをいふ。

(902)

思ひます人し云々 我より人を思ふより、お

(903)

ほく我を思ふ人はなし。おなしやうにお

もふは、我かけうつるますか、みより外なき

ゆへ、ねをのみなく。我かけゆへ我ねをなけは

か、みのかけも音をなくなり。

かすならぬ身は云々 数ならぬ身ゆへ、大抵にあら

はるれはよし。深切にあしらはる、ゆへ、いと、

物思ふてなかめらる、となり。

わすれしよゆめと云々 ゆめくわすれぬと契り

(904)

し言葉は、今わすれたる上にては、現在に

つらき。ゆめくわすれぬといふは、ゆめにて

ありて、今つらきか現在となり。

(905)

あたらしと何に云々 あたらしきは、あつたら

しきなり。いのちをあつたらものと、何おもひ

けん、人にわすらる、とふるくなる身を、あつ

たらものと何て思ふたとなり。

ちはやふるかみの云々 かみのいかきを越るとた、

る。今は恋のためならば、それもかまはぬ、いか

きこえゆかんとなり。

恋五

すてはてんいのちを云々 すてたるいのちか、さ

(906)

きの世にてあふたのみになるとなり。

ありへんと思ひも云々 この世に長生せんと思ひ

(907)

かけぬと、世中却て身をなけかぬ。長生せん
と思ふていろくの苦をするとなり。恋の歌に
はあらず。

(908)

いつはりと思ふ云々 おとこのことはいつはりと思へ

とも、一度契りかはしたるおとこゆへ、ほかの人

まことをいふとも、それはたのます。やはり

そひなれたるいつはりおとこにつくとなり。今

さらには、今あらためてなり。」

(909)

ひたふるにしなは云々 さもあらはあれば、とふなり

ともなり。任他と書。

(910)

恋しきはいろに出ても云々 色はしむものゆへ

むねにしむらんといふ。むねにしむは、こたへ

るをいへり。

(911)

いかてくこふる云々 いかてくは何とそして也。

人をこふを折ふしなくきめてをきたし。

なくきますと、のちの世までの物思ひとなる

となり。

(912)

うしと思ふものから云々 ういと思ふ人の恋し

きといふは、其人の何ことをしのふ心あるそ

となり。

(913)

身のうきを人の云々 我うき身てつらし。し

かれは人は我につらきはづなり。それを人か

我につらきと思ふは、我か我にてない我な

らは、それを合点してゐるはづなり。うき

身とは、或は身捌賤きか、又は貌みくるしきか

といふたくひなり。皆我身のういといふも

のなり。

つらしとは思ふ云々 つらいと思ふ人の恋し」二五

きは、我に我心かかなはぬといふものとなり。

つらきをも思ひ云々 つらいといふ事を恋

人かおもひしるかいなや・我ために其人

かつらし・其我につらき人か又、我をつ

らいといふ。しからは自分からつらいといふ

を、むかふに合点して、我心にしたかふは

づとなり。

心をはつらき云々 きこへす。

あさましや云々 きこへす。

あはれともいふへき云々 恋ゆへに死ぬとも」二六

あはれとは思ふまい・其人のためにこひ死

ぬに身のいたつらとなるは、さんねんとなり。

さもこそはあひみん云々 さもこそはそふこそ

なり。あふことのあはれぬといふは、もつとも

なり。せめてわすれぬとなりといは、たん

のうするに、それさへなきとなり。

おほかたのわか身云々 大かたは大抵なり。うい

とてた、身ひとつの事を、世間をうらむ。

世間にうき事なき人もあるなり。

あちおのかるや云々 このいとはもつともなり。」二七

ふる雨にいて、も云々 不出ともぬれぬる我袖の也」二八

水(雨々)の下にあなからぬれたりとなり。

これをたにかきそ云々 かきそわつらふは、ふみかき

わつらふなり。

またしらぬ思ひに云々 川の中でもゆるといふ

思ひは、いまたしらぬとなり。

しほみては入ぬる云々 しほみつると磯の草、

水にかくる。我恋もみることすくなく、こふ

る事多し。

そらにみつ思ひの云々 思ひのけふりそらにみ」二九

つるならば、詠る人のめにみゆるはつか、めに

みへす。この方も物思ひにそらを詠は、みゆ

るはつか、みへぬからは、いつはりにてはないか

となり。

かきりなき思ひ云々 紅をあくにてあらふと

色かへる。かきりなふ思ひ初てよく思ひを

人にそむるゆへ、あきとふ」三〇 思ひてもあかれ

ぬとなり。

ありそみのおらと云々 いつまでもちきり

しとをりとたのめしも、なこりもなく」三一

わする、となり。

あふみなるうち出の云々 うらみやせまはは、

恨んかうらみまいかと思案するなり。

かすならぬ身は云々 数ならぬ我こときものは

無情なるかよい。有情ゆへいろくとうらむ。

つらいといふを、思ひしるほと心あるゆへ

うらむとなり。

君をなをうらみ云々 我身かつたなきからむ

かふかつらいはもつともなるを、我身から人

のつらくなるといふをわすれたるとなり。」三二

いにしへをさらに云々 死する人のことは、心にか

かふとなり。

あふ事は心にも云々 上の五七の句は心外にあはぬ

はせひなし。わすれ果とは、ちきりはせぬと

いへり。さやはそふやはなり。

わする、かいさ、は云々 そちからわする、か、いさ

そんなら我もわすれん。そなたのこゝろ

したひと万事をなさは、そちかわすれ

は我もわすれんに、それはかりはとふも「一」

わすられぬとなり。

我はかりわれを云々 我はかりは、我ほとになり、

我かむかふの人を思ふほと、むかふの人も我を

思ふ人かほしい。さあらは世はうき事な

きはつなるに、それとても世かうからん。うか

るまじきか世中をためしてみたいと

なり。

あやしきもいとふに云々は、合点ゆかぬ事を

いふ。はゆるははやるなり。むかふかいやといふほ

と、こちからこふやうになる。何としたらは「一」

この思ひやむやうにならん。

思ふ事なすこそ云々 神にても思ふ事を

十分にはかなへる事なるまいか、しはしわす

る、ほとこの事はかなへたまはれかし。

とをき所に云々 道のまゝに云々 道のある

まゝにしたかふて、京へのほり、高砂

まてくるなり。

高砂にわか云々 我なく声高くなる。都へちか

よるゆへなり。さあらは、みやこの人のきく

へしとなり。「一」

雑春

あたらしき年は云々 としはあらたなれと、

うくひすは古年の声と同じとなり。

春くれば瀧の云々 むすふは氷なり。氷るたく

ひなくあはしくしくみゆる。糸をむすふに

あはむすひといふあり。あはひ貝のなりのやう

にむすふ。

おなし御時、桜花の云々 御いしは御

倚子なり。

思ふ事ありて云々 わさく用ありてゆく「一」

ほとになり。

かすか野、萩の云々 あさるはさがすなり。さかして

もなき名をおほすとなり。

ゆきをうすみかきねに云々 なつさはしは、なれたく

思ふなり。

しめてこそ千とせの云々 この野をしめて下

屋敷こしらへ、そこへ来てみたかよし。

手たゆく引ことにはあるまじとなり。

一もとの松の云々 齋院の齋の字、いつきとよむ

ゆへ、五本といふ意に引かけたり。「一」

正月叙位の云々 叙位は位階を授

く公事をいふ。

除目の云々 按察は民への国守のゆく「一」

しをきの善悪をみ分にゆく役、大納

言の兼職なり。按察「七」

更衣は大納言位のむすめにて、更衣

なる女なり。

康和二年云々 蔵人は天子・東宮・大臣

(1009)

の執政の家にもあり。蔵人は職なり。

ゆへに任すといはず、補といふ。民部は「三」

民戸をかそへ民の事を記録する役

なり。

ひく人もなしと云々 もろやは諸矢也。職と宮と二

つをもつゆへなり。

(1008)

山里のいへるは云々 とにみゆは外へみゆるなり。

春の野にところ云々 床とうけたり。結句みいて

たりや。君にてよき場所をみ出したる

かとなり。

(1002)

春の野にはるく云々 世に所せきは勢なきこ

と。我身のことをいふ。「三」

いつこにかこの云々 どこにも咲花を、かく尋て

こひずともよし。我心からたつねまはると也。

(1007)

さくら花わか云々 花か我やとにはかりあるものな

らは、其ほかのものはなきとて、不自由にお

もふまいといへり。物くさは物の種々也。我に

なきもの、多きといふか、なき物くさなり。

(1006)

みつし所にさふらひけるに云々 みつし

所は天子の御膳をする所。下々にも、し

もをはたらき喰ものする下女をみ

つし女といふも是なり。蔵人所は「三」

(1004)

蔵人の役所なり。

もろともにおりし云々 そなたと、もに不居し

て、事多くてみつし所には花をみぬに、

花をくる、ゆへ、これにて世間の花も思ひやり、

(1000)

春中をくらさんとなり。

まてといは、いと云々 君にまてといふは

おそれ多し。せめておもしろき鳥なり

ともなきてとめましたきとなり。

うくひすのなきつる云々 なへにはゆへになり。みゆき

を雪として、ゆきをまた花とみたり。行「三」

列の花くしきをいへり。

(1004)

清慎公の家云々 大臣の家には禁

中とおなしく南(殿々)上の間あり。それをま

ふらひといふ。さふらひはこ、にさふらふと

いふことにて、主人の召はこ、にさふ

らふといふて社出るところなり。

みやま木のふた葉云々 若芽の二葉三葉に出

るか、冬からきえぬゆきのやうにみせると也。

(1001)

もつともさくらの花なり。

こんくうち侍ける云々 こんくうつとは「三」

鐘鼓うつをいふ。はたやきは畑焼也。

(1002)

うしろめたいかて云々 うしろめたは心もとな

きなり。

(1006)

ひさしかれあたに云々 ひさしくもたせたい

と思ふてかめにさせとも移ひたりとなり。

下の心は、かよふ女にて外心か出来たると

うらむなり。

(1001)

としことに春は云々 春はくれともといふゆへ、

たくりとれば絶そふなるものを、たえぬと

なり。「三」

(1008)

亭子院京極の云々 さくらをとくら

(1002)

にしては、物を入れるものをくらといふ。
さくらを鳥籠につくり、山すけをう

くひすにむすひそへて、この歌をかき
てうくひすのくちへくわへさせたり。

ひえの山に云々 侍けるま、には有にま
かせてなり。

左大臣のむすめの云々 中宮のれうにて

云々 中宮の御物にと、のへたる屏風也。

ほと、きすかよふ云々 ほと、きすのかよふかきねの「二四一

うの花のおもしろきところなるを、何ぞ御氣
にいらぬ義があるか、君かみえ来ぬとなり。

声たて、なくと云々 こなたのあはれなる義、いふ

はまことにてなし、なく声たつれと空音

といふ、それゆへ袂かぬれぬとなり。

かくはかりまつと云々 待といふをしるかして

木すゑ高くほと、きすなきわたる、しらは

やはしれはやなり。

とこなつの花をし云々 下の句過る月日の数を

しれば、年のよるかされる。床夏のはなを「二四二

みなくさめは、うちはへてなかきはかりにて、

月日のすくるかすはしらぬとなり。

一條撰政の云々 北方下屋敷に居た

まふときなり、其むすめか贈皇后宮

なり、またこのむすめ、女御のときといふ

意。

しはしたにかけに云々 母のかけにしはしもかくれ

ぬときは物思ふとなり、うなたれるは憂ふかた

ちなり、なてしこの花は我身をいふ。

雑秋「二五三

織女のあかぬ云々 ゆ、しきはいま／＼しきなり。

けふは一年一度ならてはあはぬいま／＼しき

日ゆへ来ぬかよきとなり。

七夕のうらやましきに云々 夫婦あふかうらやま

しきゆへ天子おりたち祭らんとなり。

天禄四年云々 らんこは乱著なり、著

うつをいふ、まけわきを云々 かけものに

して負たり、この扇はすきあふき

ならん、羅にてはりてかさせは外の

すきみゆるためなり。「二五四

水のあやを、りたち云々 我衣は七夕つめにかす

夜ゆへ、我衣はぬきて我は水のあやを着ん

となり、七夕つめとは七夕つめのためといふ意也。

秋風よ七夕つめに云々 あはんとすらんはあやま

りなり、あかんとすらんなり、いかなる世にかあ

くほとあはんといふ。

天川のちの云々 のちのけふたには来年の七月

七日なり、来年のけふさへはるかなと思ふに、

唐土へゆく人はなをはるかなるとなり。

あひみすてひとひも云々 ひとひもあはぬといふ「二五五

なし、ゆへに一日不逢と七夕より我なけきか

まさるとなり。

秋の野の花の云々 とりすへては引からけてなり。

いへつとにあまたの云々 花こそ賞すへきを、たかす

へたれば花を折手はふさかれり、不調法なるこ

と、いふ意。

こてふにもにたる云々 まねくゆへに来いといふ
ににたりとなり。

(1105)

延喜十九年云々 翫潺湲せ、らきと

(1106)

訓す。九月十三夜翫月濫觸このとニニ
きこの歌よりなり。

も、しきのおほ宮ながら云々 宮中なれとも

(1107)

八十嶋をみる心ちするほとにはれたると也。

八月人の家の云々 つり殿は辺へ築い

(1107)

たし立る亭なり。

はしり井の云々 きこへす。はやくはしり井しり

(1108)

たし。駒に水かけんといふ意か。

むしならぬ人も云々 むしは多く来れとも

(1109)

人は来ぬ。いふせきところに何とてきたる

とよろこふ意なり。ニニ

(1110)

ちかとなりなる云々 歌よまむさまいかて

云々 歌よむやうすかみたく、歌もみた

し。心にしあらねは云々 心に歌よまふ

ともむかふの人思はず、す、み歌吟し

いたしもせぬ。かれも又云々 むかふからも

こちのやうに思ふて荻につけてさし

木したり。かたくかへしたる女のもと

よりさしこす。

(1111)

かのみゆる池へに云々 そかきくは承和菊といふ。承

和のとき黄菊をりから翫ふよりかくいふ。ニニ

又説には十日菊といふ菊は九月九日も翫す。
それか十日のきくは詮なきといふ意。色のて

こらさは色こきといふ意なり。

吹風にちる云々 忠見この裏にあつからす。ゆへに

(1121)

この歌を奉る。菊かさくら花のやうにちらは
風にふきちり来て外からもみへん。さなきゆへ
外からはみえずしてこの裏にあつからぬか
残多となり。

老か世にうきこと云々 菊も老すればうつろふ、

(1122)

人もはなれたるはうつろふなり。菊は老てニニ
もうきはきかす、それさへ移ふ。まして人な

れは年よりてもうつろふ。色かはるとなり。

わきもこかあかも云々 あかもは赤裳なり。

(1123)

しらなみはふるさと云々 来たるときはしら衣着て

(1124)

きたるか、紅葉のにしきを着てかへるとなり。

蔵人所に云々 ひおの使は諸臣に氷魚を

(1124)

賜ふに、諸臣へ氷魚をもちゆくをいふ。

いかなれば紅葉にも云々 下の句つこもりゆへなり。

(1125)

冬おやのさうは畏なり。

権中納言義懷云々 齋院に奉公すニニ

(1140)

る。姉も齋院に奉公す。

(1143)

み山木をあさな云々 寒きほと炭やきはために

(1144)

よきゆへ、さむきをこひしかるなり。

祭のつかひにまかり云々 すりはかまはず

(1147)

りこみもやうのはかまなり。

をみにあたりたる人の云々 小忌衣なり。

(1148)

神事に着るひかけかつらなり。

右大臣恒佐家云々 臨祭ニニは加茂石清水

(1149)

に有。恒例の外の祭ゆへ臨時といふ。

しもかれにみえこし云々 我身の春にはあはぬと也。 (1155)

梅もみな春云々 下の句、我は出世するたよりも
あらは身の春をまてとも、さのこともなきゆへ、
春を待へき趣向もなき身は、何の事じや
ぞとなり。

雑賀

きのふよりをちを云々 きのふより散過てしま (1156)

ひたり。これより末の百とせの春のはしめは
けふとなり。

万代をかそへん云々 真砂に子をそへたり。 (1157)

松のねにいつる云々 松の根になかれいつるいつみ (1158)

は松と同じき物を、松と、もに不絶となり。

冷泉院五六のみこ云々 五六のみこは五 (1159)

の皇子、六の皇子なり。
松か枝のかよへる云々 とくらは鳥の居ところ、座
をくらといふ。くの字すむへし。かよへるえたは
枝とくと交るなり。

大武国章云々 いかは五十日なり。出 (1160)

産より五十日め、それから又百日といふ
て祝ふなり。わりこは松わりこはかけな
かしなり。あふきのかたあり。うたを絵に (1161)

か、すとあはは、様器也。ごふん絵なり。ご
ふんにて地をだみて絵の具にて絵を

かく。京師に盆にわりきやうといひ売る
ものありべきに、五合ほと縁つけて藤

やりばにてとぢたるもの也。このふかきも
のにてそれにふたするか、今茶人の用ゆる

縁、鶯の尤もなかくいくつも重ねて上
にふたしたるものなり。あふきかたは
わりこの惣はこなり。丸き惣箱なり。

丸きもの、中へわりこを入るゆへ、中かあ (1162)

ふき形になる。京師の火消の弁当是也。

松のこけ千とせを云々 鶴の巢にみゆるほとに (1163)

千とせをかけて若生ひしけれとなり。
も、しきに千とせの云々 けふのかうふりか千年のた
めしのめつらしきと也。はたはまさになり。

五月五日云々 かきりちまきはさ、やこ (1164)

もにてまきたるうへを、五色の綿(錦々)
いとにてまき、頭まきたるあまりなか
くのはしをくなり。

心さしふかき云々 この方のこ、ろさしふかきゆへこ (1165)

れをおくる。けふか千年のはしめにて、これを
いつかわすれんとなり。さ月のきはちよつと也。

ちよつとははしめの意なり。
千とせへん君し云々 後はみえぬものゆへ、気
つかひあり。うしろやすきは気つかひなき意。

東三條院の云々 かんたちめは三位以上 (1166)

公卿をいふ。
右大臣家云々 ふみつくりは詩なり。

すみそむるすゑの云々 庭の池のみきはなり。多 (1167)

佳趣といへは種々さまくならへたて、よ (1168)

まねはならぬと思ふは僻事なり。末の心
のみゆるかなといふに、多き意あり。みきはの
松のかせうつす、一と色にて多の字をかぬる

意味ふべし。

千とせふる霜の云々 鶴のよはひ千年はし (1170)

れたる事ゆへのけをき、た、ひさしきものは
きみとなり。

流俗の云々 流俗はならはしと訓す。尋常 (1170)

の色にてはなきとなり。

珍重すへき云々 珍重はもてはやすと訓する世。「三十一」 (1171)

かゝらても云々 かゝらてもは、かくあらすして
もなり。かけ句けさうの意ゆへいままてかく
して人にもあはすしてもゐられたる

に、かすみかゝりてけふ思ひたちぬるとなり。

ひろはたの云々 をそくわたらせ云々 仙 (1172)

旧へをそくわたるなり。

くらすへしやは云々 かやうにをそくかへらんとも (1172)

思はなんだとなり。

とふやとそわれも云々 そなたかはやくとふかと (1173)

ゆめにあふへき云々 ねふたくなりたるか、ゆめにあふ

へき人が先に待てるならんとなり。 (1173)

ひとこ、ろうしみつ云々 うい事をみたとなり。

引よせはた、には云々 ちへまひきよせてみれば、いやと (1174)

いふてしきによらず。駒もつなを引はいやと

あとしきりする。さすれはなはかきれるにか (1175)

けて名はたつときく。却て世間へ名かたつ

となり。 (1175)

夏はあふき云々 あふきも火も二つとも人にはな

れぬものゆへに、二つのものになりたし。さすれは「三十一」 (1176)

つれなき人、つねによりつくとなり。

恋するに仏に云々 恋はやめられぬ。こひする (1178)

人か仏になるならば、我こときしみつくも
のなきゆへ、浄土のあるしにならん。この裏あり。
地獄に墮すとこのやうに恋をしてよから

ぬときとる意なり。

灌仏の云々 灌仏に童子出る事あ (1178)

らん。

から衣たつより云々 釈伽出生のとき、龍出て (1179)

水を吐て産湯とする。男色のうたなり。「三十一」

つらからは人に云々 恋の意うたかひにゆくに、そ (1180)

ひふしの女出る事もあらん。其女かつらから

は、一夜覆たとかへつていはん、もしつれな (1180)

らすは、かくさんとなり。

年つきをへて云々 いまはさらによにも (1181)

あらし云々 遁世とか、又田舎なとへゆかん

となり。かくいひて後、またけさうした (1181)

る女の妹にゆく末を契りかたらふなり。

心ありてとふには云々 世中にありやなしや、無事 (1182)

なるか、遁世にてもしたるか、き、たきはかり「三十一」

となり。 (1182)

きみとはていくよ云々 竹のひるは竹の古根のおひ (1184)

かはるなり。かよはずしていくよ経たるやらしら

す、すてに色かへぬ竹さへおひかはり、我根の竹 (1184)

かてきたると女のかたよりよめる。

こぬ人をしたに云々 月は下からあふき待と思ひ (1185)

待とをかけてよめり。

あつきゆみひきみ云々 心を引てみたり、不引にみ

(1106)

するよし。しからはくるかと思へはこぬに、きはまりたるゆへ、よそにみねはならぬとなり。こ「三〇」すはこそ来人ならば、来ぬと待せはなり。こはこそは、来たらはこそもはや来ぬなり。

(1106)

東よりあるおとこの云々 東へゆかぬさきにあふたる女なり。いかていそき云々 また東にゐんと思ひたるか、はやくかへりしといふなり。

(1106)

をろかにもおもは云々 こなたを大切に思はずは、東のふせやに覆もせん、こなたを思ふゆへ、はやくのほりしとなり。ふせやといひしは覆よといひしといふ意。一三三

(1106)

女のもとに云々 ふみのつまはふみのはし也。跡もなきかつらき云々 こちからやりたるふみのかた

(1106)

はしかきたるかとおほめく。もし我ふみのかたはしかとなり。上にあるへきもしを下にきたるなり。上の句、久米のはしわたしはてぬゆへ、跡もなき云々といふ人のかよはずはしゆへ、跡なきなり。

(1106)

かきつくる心云々 草帯は我心に入たる事をかく。書たる事も筆の跡もみな書人の心みゆるあととなれとも、又ふとこれを見てしのふ「三三」人もあらんかと思ふて書となり。

(1106)

岩はしのよるの云々 あかつきにいなぬとよるのちきりたゆる。明はなれかへると侘しき人めかある。人かみつけるとよるのちきりたゆるとなり。

人もみぬところに云々 人もみぬかくれきとにて

(1107)

きみと我とよの中にあるまじき一奥のなくさみをむかしせしか、今恋しきとなり。赤裸にておとるといふやうの事ならん。この歌、友達の間うたなり。せぬわきくははつかしき人にみせられぬわきなり。一三三

(1107)

成房朝臣云々 いひむろは献山なり。いきたるかしぬるか云々 くしけはた、ひろくはこの意によめり。枕はこなり。

(1107)

いつくともところ云々 好色のおとこのありさま也。

(1107)

また少将に云々 うねへまちは、采女のつほねの並ふところ。采女は諸国より貢する禁中の何やかやの事に、上につかはる、雑使の役なり。天子の御手もかけらる、ゆへ、美女を撰て奉るなり。一三三

(1107)

池みつのそこ云々 実あるものならねは覆ぬとなり。中納言敦忠云々 兵及佐は武官にて禁中のかためする役なり。

(1107)

人しれすた。めし云々 兵及 及門を柏木といふ。柏木の葉守の神といふてまもるによせたり。意はたのめしことのりきこへ、世にふるとなり。

(1107)

秋萩の花も云々 しかはそふにて其許のいふことくに来るなといふ意。人のめし侍ける。めしは奉公するおとこ、一三三ひとやは卒なり。

(1107)

みやつくるひたの云々 ほとくしはておの、音は

(1200)

尤らしきなり。爰にてはほど、こんど、いふ
意。

はしたかのとかへる云々 女に契りしをたかへぬ意。

(1200)

権は常盤木なり。それさへ葉かへすともわか

心はかへぬとなり。

ゆく水のあは云々 水の泡ならば、なかれて深

(1202)

き浅きをしらんとなり。

ともかくもいひ云々 一向とちらへなりともいひ

(1203)

はなて、我浅き深きの心は外よりはみへぬほ
とに、とふなりともいひきれとなり。

むもれ木のなか虫はむと云々 外からはみえねとも、

(1207)

埋木の中はむしはみておれるものなり。人

の心も外からはみへぬとなり。下の句、道を目路

といふ。来る目路のはしは心してとをれと

人の心にたとへり。表は久米路のはしの事

なり。

(1243)

山しなのこはたの云々 馬にのりゆたくとくる心

(1243)

てなし。かちはだしにてくるか深切なり。「ミヤ
つれく」と思へは云々 うき沼におふる声なり。今こ

ひしきといふも、ついあく世ありてはかなき

となり。

中くひとり云々 中くはかへつてなり。

(1200)

久かたの雨の云々 いでへき人の不出が埋れたる也。

(1202)

おとこの云々 すきは従者・下人なり。かけ

(1203)

よと、もに雨ふる云々 すまぬはおとこのすまぬなり。

(1204)

あふことのかくて云々 みこか大皇太后に疎遠なり。

(1200)

この方の事を思ひいだす人ならば、あふはづ
なり。思ひいださぬ人のためにあふことかつるに

やむであらふとなり。ためは上とみればよく

よむ。

けふかともあす云々 けふあすともしらぬいのちなる

(1207)

ほとはやくあへとなり。

忠君宰相まさのふか云々 てうとは手道

(1200)

具なり。

なみた川水まされはや云々 枕かうきとまらぬゆへ

(1205)

枕かそなたへいぬるとなり。

延喜御時云々 かむしは勤事なり。勘当

(1200)

なり。御前ふさがりなり。

よの中をつねなき云々 よいかと思へはあしく、まも

(1200)

なくかはるものなるに、勤事ありてからまた

しゆひもよくなるへきに、ひさしくかはらぬと也。

つらきをはつねなき云々 つらきもつねなきもの

(1200)

なれば、ひさしくゆく末の長きを何とてた

のみにせぬそとなり。

それならぬことも云々 そなたに來なといふを

(1203)

あしくき、ほかにここにさし合ことある。

この來なといふたことを耳にとめ、やかまし

くいふとなり。わすれねは、來なといひたる

事なり。

みかりするこまの云々 青つ、らに駒の足まとふ

(1204)

かほだしになると思はんとなり。

きみみれはむすふの云々 むすふの神かつらき人

(1205)

をつくりこしらへたるとなり。

いなりのほくら云々 ほくらはほころなり。

(1203) 神書

神靈は火なり。火をかかすところゆへ、ほこ

らといふ。こらはくらなり。

灌の水かへりて云々 かへりてものおとこにそひ

(1205)

たらは、七日余りのしるしと思はんとなり。

灌の水すむは、まくらこと葉なり。

ゆ、しとていむ云々 上文字いまくしきなり。あ

ふきは秋風とていむ。うきをあふきの風に

つけて、これて合点したと思ふてやまね

はならぬ。

ひとりして世をし云々 夫婦相すみてこそ

世をつくすかひあれ、ひとりすむは松のとき

はのことくひさしくてもかひはなきと

なり。「ボッ

たのめつ、わかれし云々 せめてはせめては

なり。としつまるをとしせめるとかけたる

なり。

哀傷

さくら花のとけ云々 花はついちる、ちりやすきも

のはのとかな花よりなみたかもろく、花はも

ろからぬとなり。下の心は花より人のいのち

かもろきとなり。

花の色もやとは云々 かはれるものはつゆはかり

といふか、きえたといふ意。「四

ふち衣はらへて云々 服ぬくと、蔽するふし衣

を着はしめたるときより、すつるときかなみた

まさるとなり。

としのふか云々 重服はかとりを着る。

(1204) 神書

無紋のものなり。色は虱に染るとみゆる。

としふれといかなる云々 夫婦の中、年ふれは

あくものなり。あひ思へはいつまでもあかす。

いかなる人か死別れせぬ人あるへきとなり。

つねならぬよはうき云々 死んでもおしむ人かす

に入ればよし、我身なと死すともおしむ

人かすには入るましきとなり。

さ、なみやしかの云々 てこら、ては休字、こらは女なり。

おきつ波よる云々 なるる君かもは、かくなれるきみ

かななり。枕まくといふ、枕引よせもとむるや。

まくらのはは休字、まくといふ意にて、一身

をまかすといふ意なり。

いへにいきてわかやを云々 さ、の穂とうけたるなり。

まきもくの山へ云々 ひ、きゆく水はやき水なり。

我世もかくはやきなり。みなは、水泡なり。

朱雀院うせさせ云々 大皇太后宮は

後の事にて、このときまたいとけなし。

くれ竹の我世は云々 ことには格別なり。我世は死

ねとも子孫たえぬとなり。なかるへき哉とは

なるへきやあるとなり。

草まくら人は云々 草まくらといふか、人は何と

かいふ誰かするものそといふに、畢竟いふて

みれば、つるの柄か野山なるゆへ草枕といふ

ものあるとなり。

契あればかはね云々 ちぎりあればこそ死ぬ人

にてもあふ・死人ゆへ近づきになれともあ^{一四三}。

ちからは其許は誰とはいはぬ。我をとひそふなるものに、思ふこの方からは誰か死かはねとふゆへなり。又、契りあれは死かはねにもあふ、我死にたるとき我死かはねをみたる^{とて}、誰か又かやうにとはんとなり。

世中に牛のくるまの云々 法華經火宅の經説也。⁽¹⁰⁰¹⁾

法師に云々 た、うかみは、なかみをた、うかみの中へ入るなり。⁽¹⁰⁰²⁾

思ひしる人も云々 世のはかなきを思ひしるなり。女院御八講云々 八講は法華經八まきを^{一四四}講するなり。問者ありてこたふ。問答もあるなり。⁽¹⁰⁰³⁾

こふつくすみたらし川の云々 こふつくすは劫つくすなり。龜は千年のよはひをつくす。齋院は仏のことはいみものにて、かめの川にはかり劫をつくすこと我ゆへ、法のうき木にあはぬとなり。⁽¹⁰⁰⁷⁾

天曆御時云々 賀の料を諷誦の料にしたるなり。諷誦は其人の徳、又仏の功德をいひたて、あかうするなり。

⁽¹⁰⁰⁸⁾

おこなひし侍ける云々 行ひは経か礼^{一四五}押するをいふ。行ひにくたひれ覆て

⁽¹⁰⁴¹⁾

おきぬなり。つきおとろかしてはおきよくとゆすりおこすなり。

あきことにはらふ云々 はらはねはつもるちりのことく、けだいをとかむる意。⁽¹⁰⁴¹⁾

光明皇后云々 仏跡は仏の足あととなり。⁽¹⁰⁴⁵⁾

みそちあまりふたつの云々 三十二相なり。も、草にやそくき云々 百八十石母の乳のまねは人にならす。其思のため、けふあかうするとなり。^{一四六} ⁽¹⁰⁴⁶⁾

かひらゑにとも云々 かひらゑは靈山の名なり。この二人かひとゑにてやくそくしたるとをり、日本にてあひたるとなり。⁽¹⁰⁴⁷⁾

(七行分白紙) ^{一四七}

【略解題】

凡例で触れたように、本書の書写者・書写状況は不明であるが、次の四点から本書の親本の存在が推定される。

(1) 目移りの個所が存在する。：一ヶ所

(云々)思ふらん侍徒に云々 つきなきは不似合なり。⁽⁷⁵⁷⁾ 757番歌の一部(波線部分)の注釈なしに、次の歌の詞書の注釈に入る。

(2) しかるべきところで改行しない個所が存在する。：一ヶ所

(三十三)

池みつのそこ云々 実あるものならねは覆ぬとなり。中納言敦忠云々 兵ゑ佐は武官にて禁中のかためする役なり。⁽¹²²¹⁾

1221番の歌の注釈(波線部分)から改行せずに1222番詞書の注釈を続ける。本書においては、次の歌(もしくは詞書)の注釈に移る際に改行するが、ここだけはそれがなされてない。

(3) 注釈部分を脱する個所が存在する。…五ヶ所

(一九五)とをき所に云々 (0000書)

(二四七)左大臣のむすめの云々 (10000書)

(二五七)ちかとなりなる云々 (11000書)

(三三三)ひろはたの云々 (11000書)

(四一七)年つきをへて云々 (11000書)

猶、この他に、注釈部分に空白を含む個所も存在する。…一ヶ所

(三二七)除目の云々 按察は民への国守のゆく(マ)

しをきの善悪をみ分にゆく役、大納言の兼職なり。按察(七キカニロ) (10000書)

(4) 衍字の個所が存在する。…一ヶ所

(四二七)せめてはせめてはしめてなり。 (1111書)

さて、本書の内容は、北村季吟の『八代集抄』といった当時流布していた注釈書の流れを汲んだものではないと見られる。以下、本書の特色として目に付いた二点を挙げる。

(1) 注釈部分に「きこへず」と記す個所が存在する。…四ヶ所

(六五) よるとてもねられさり云々 きこへず。 (001)

(二六七)心をばつらき云々 きこへず。 (001)

(二六七)あさましち云々 きこへず。 (040)

(三三三)はしり井の云々 きこへず。 はやくはしり井しりたし。駒に水かけんといふ意か。 (1100)

(2) 書写段階での写し誤りというよりは、聞き誤りと思われる個所が訂正されないまま存在する。…一ヶ所

(四三三) つるの柄が野山なるゆへ、 (11000書)

この部分は「終の住処は野山とぞ見る」という1326番の下の句の注釈であるので、「柄」は「住処」「つまり「家(いえ)」「え」の聞き誤りと見られる。これは、おそらく原本の誤りが温

存されたものであろう。
本書は、本来上下二冊であったと見られるが、管見によると現存が確認されるは下巻のみである。

九州大学大学院修士課程